

上下無歯顎患者に上顎総義歯，下顎インプラントブリッジで
咬合回復と審美回復を行った症例

○中野 稔也，林 玄治，山本 雅久，堀田 康記
愛知インプラントセンター

An occlusal and aesthetic rehabilitation case with a maxillary complete denture and mandibular implant-supported bridges on edentulous jaws

○NAKANO T, HAYASHI T, YAMAMOTO M, HOTTA Y
Aichi Implant Center

I 目的： 上下無歯顎患者にインプラントを使用して咬合回復を行う際，上下顎ともにインプラント治療を行うことが望ましいが，費用等の問題でそれが不可能な場合，上下顎どちらにインプラント治療を優先させるかは意見が分かれるところである．コンビネーションシンドロームの問題から上顎にインプラント治療を優先させるという考えもあるが，われわれは解剖学的特性から，通常，下顎のインプラント治療を優先させている．今回，上下無歯顎患者に対して，上顎総義歯と下顎インプラントブリッジによる咬合回復を行った際，過去の顔貌写真と前歯の審美性，およびセファロ分析を参考にし，良好な結果が得られたので，その概要を報告した．

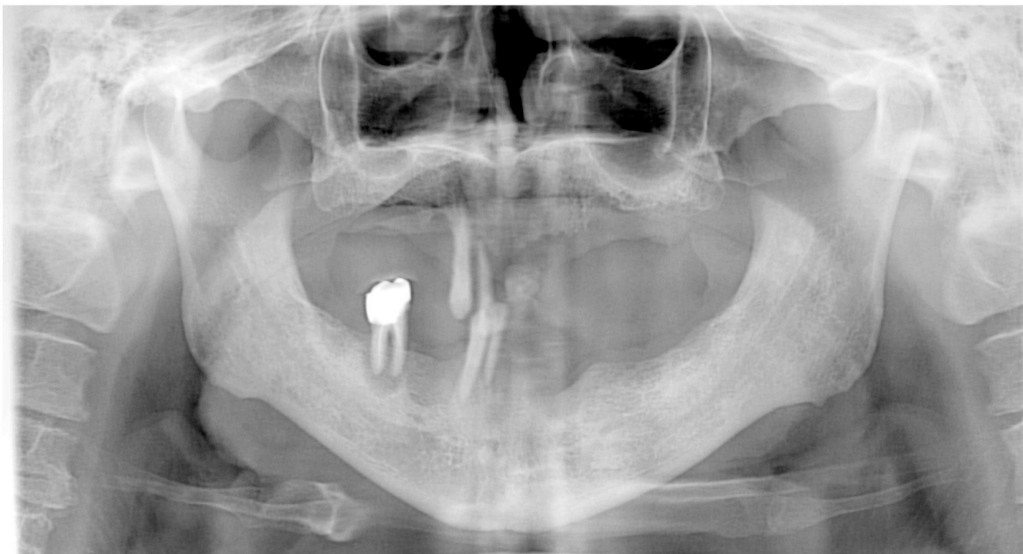
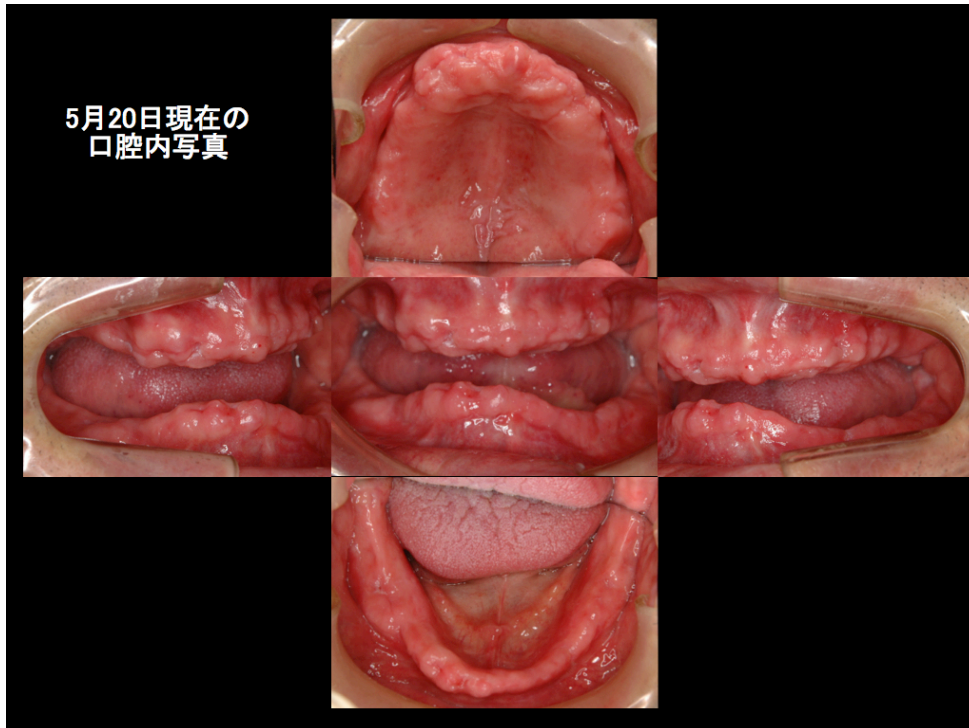
II 症例の概要： 2008年1月初診．患者は59歳男性で，重度歯周炎による咀嚼困難を主訴に来院した．残存歯である右上23，右下236は動揺が著しく保存不可能のために抜歯し，患者の希望により，抜歯直後から上下暫間総義歯を作製した．患者とのコンサルテーションにより，上顎金属床総義歯，下顎インプラントブリッジによる咬合回復を行うこととなったため，暫間義歯を造影剤入りレジンに置き換え，CT撮影用ステントとして使用しCTを撮影した．SIM/Plant[®]により下顎左右346部に6本のインプラント（Zimmer Dental社 MP-1）を計画し，SurgiGuide[®]を使用して埋入手術を行った．埋入後3か月で2次手術を行い，カスタムアバットメントと下顎プロビジョナルレストレーションを作製し，同時に上顎金属床総義歯を口唇と人工歯の位置による審美性を考慮して作製した．その際の咬合高径や歯の見え方は，患者の20年前の顔貌写真を参考に決定した．上顎総義歯と下顎プロビジョナルレストレーションを装着して咬合の安定と審美性の回復を確認した後，下顎最終補綴へと移行した．

III経過： 最終補綴から3年9か月経過しているが，咬合機能や審美性，清掃性に問題は無く，良好な経過を経ている．

IV考察及び結論： 本症例のような上下無歯顎患者の治療法の一つに All on 4 があるが，Dr. Malo が推奨する前歯部骨幅5mm，深さ11mmが日本人には適応しないことが多いことや，即時に適正な咬合を付与することには熟練を要すること，また，ブラキシズムなどパラファンクションへの対応が困難であることなど，課題は多いと考えられる．

本治療法は、すでに確立された安全性の高い治療法であり、正しい咬合の付与によって、危惧される上顎前歯部の骨吸収も起こることなく咬合回復も十分望めるため、有用性は高いと考えている。また、患者の過去の顔貌写真を有効に使用し再現することにより、満足いく審美性が得られることより、これからの高齢者社会において、本症例のような治療法が増加していくものと考えられる。

治療前



治療後3年9か月

